Japanese Association for Religious Studies

れでは、そもそも近代科学の産物と言ってもよい宗教学、宗教社会学、その一領域である現代スピリチュアリティ研究において、玉城の近代仏教学批判はどこまで応用可能なのだろうか。

仏教学に限らず宗教学全般において、研究者自身の宗教体験の有無や質が、研究対象の選択、対象へのアプローチ、対象理解に大きな影響を与えることは事実だろう。もちろん、研究者の資質や志向性、あるいは研究対象の特殊性などを考慮して、個人的な宗教実践をしない、あるいは実践はしてもプライベートな事柄として研究にできるだけ関連させない、というのも自覚的な選択として認めてよいと思われる。だが、玉城が仏教学において提起した諸問題は、当事者の体験に着目する現代スピリチュアリティ研究においては、少なくとも研究者自身による体験について議論の俎上にのせることがきわめて有意義ではないかと思われる。

パネルの主旨とまとめ

葛西賢太

瞑想から得られる知はどのような性格をもつか、宗教研究に何をもたらすのかを再考したい。瞑想を単純に是認する素朴な体験主義も、デタッチメントを客観性の担保とする素朴な実証主義も問題を残す。瞑想テキストの解釈と注釈に専念する文献学のような伝統がある一方で、瞑想実践が、それと隔てられて存在すること――美容のためにヨーガを実践する人々は、ヨーガスートラを読まず、時にはその存在すら知らないなど。素朴な実証主義でも素朴な体験主義でもなく、このようなギャップを架橋する道が見出しうるだろうか。瞑想実践者の立場性の反省を踏まえつつ、その可能性と限界を問うことができるだろうか。

【鶴岡賀雄氏コメント】　本パネルでは瞑想 meditation という実践を、研究対象としてではなく研究方法として導入することの可能性が問われた。この問題に関して二点コメントしたい。第一点は瞑想の概念規定について。「瞑想」を宗教学の術語として用いるには、その内包的および外延的定義が未だ曖昧に思える。また、この言葉自体はキリスト教の修道制に由来するものであり、この語の概念史や系譜学的検討が必要となろう。付言すれば、修道生活においては、修道者としての信仰や生き方の全体からいわゆる瞑想だけを切り離して実践することは考えられない。これは次の第二点に関わる。研究者が、個人的求道だけでなく学問研究に資するものとして宗教的瞑想を行うという発想は、瞑想をそれが生まれた特定の宗教伝統と切り離して実践しうるものとする瞑想理解、および研究者の身分保障を前提するだろう。キリスト教神学が強力だった十九世紀の宗教学成立期には、宗教学者は自身の信仰や実践と学問研究を切り離すことで学の自立を確保しようとした。しかし今日では世俗的宗教研究と神学との力関係が逆転し、宗教の力に呑み込まれずに宗教について学的に語る制度的自由が確立している。バレーラは自然科学、井筒や玉城は厳密な文献研究という自律した知の基盤を確保していたからこそ、特定宗教に所属せずとも瞑想

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

の有意義な実践が可能となった。こうした今日的状況下でこそ（井上氏が紹介された Mindfulness Based Stress Reduction をもじって言えば）Meditation Based Study of Religion の有効性を新たに提起しうるのであり、本パネル提題者たちの態度は宗教と宗教学の区別を曖昧にして研究の学問性を危うくする退行ではない。ただしこの試みが新たな地平を開くためには、そうした研究にふさわしい学問的言語（宗教的達人の言説とも堅実な実証主義のそれとも異なる、相互批判に耐えうる公共性をもった言語）創出、研究作法（近代アカデミズムに許容され、あるいは接続できる）確立が大きな課題となるだろう。

【全体討議】①気功は重要な身体的実践。言語と身体的実践にからむ重要な実践として、フォーカシングと、レイコフとジョンソンの理論がある。②認知療法の伝統とマインドフルネスとの比較で、瞑想を活かした心理療法にて安全担保の方法は？伝統的仏教瞑想における戒・定・慧や師弟関係という器によって意識変容や神秘体験に対する充分な強さを持った観察自我の育成が担保され、転移・逆転移を上手に使いこなしてアンビバレンスの受容とナルシシズムの超克が促進されてきたことに学ぶ必要がある。③イスラームの庶民にとっては、シャリーア体系よりもファトワによる断片的具体的解釈が重要。またスーフィズムは知的と同時に庶民的な伝統もあることを葛西報告に指摘したい。④瞑想による研究が集団力学により暴走したとき、研究の質や安全性の担保は？　歴史的方法や文献学的方法などの既存の方法を否定せず、それらを前提として瞑想的方法を加えると提案したとおり。

近代国家におけるサンガ・僧侶

代表者・司会　林　淳
コメンテータ　蓑輪顕量

なぜインド仏教は消滅したか

立川武蔵

一　インド仏教史概観

紀元前五、四〇〇年～紀元一二〇〇年頃の千数百年間のインド仏教史は三つに分けられる。仏教誕生から一世紀頃までのインド初期仏教、その後、六〇〇年頃までの中期仏教、そして六〇〇年頃～一二〇〇年頃までの後期仏教である。インド仏教の中期および後期は、大乗仏教が勢力を有した時代であるが、後期仏教の時代では大乗仏教の一部として密教（タントリズム）がかなりの位置を占めた。密教は三時期に分けられる。四、五世紀から六〇〇年頃までの初期密教、六〇〇年から一〇〇年余りの中期密教、その後一二〇～一三〇〇年頃までが後期密教である。七、八世紀に仏教はネパール、チベットに導入された。

二　ブッダの問題―個体の死の問題―

パンジャブ地方に侵入したインド・アーリア人たちは約千年をかけてインド平原を開拓したが、インド東部に至った頃、彼らの生産様式や思考に変化が起きていた。特に都市生活者の中には「死ななくてはならない運命にどのように対処すべきか」

NII-Electronic Library Service